

【氏名】小澤 実

【所属大学院】（助成決定時）東京大学大学院人文社会系研究科

【研究題目】

紀元千年前後スカンディナヴィア世界における、戦士層の死とその記憶に関する研究

【研究の目的】

申請者の研究は、大きな言い方をすれば、紀元千年前後のスカンディナヴィア人がどのようにして死に向かい合っていたのかを明らかにすることにある。紀元千年前後といえば、西ヨーロッパの大部分ではキリスト教が浸透し、キリスト教の方式にのっとった死への態度を社会全体で了解していた時期に当たる。しかしながら同時代のスカンディナヴィアは、ようやくキリスト教が社会不覚へと浸透し始めた時期であり、したがって多神教である在来宗教と一神教であるキリスト教がせめぎあい、死に向かう態度がその根底で変容しつつあった時期と考えられる。この時期のスカンディナヴィア世界に特徴的な記念建立物であるルーン石碑は、本質的に残された生者が死者を記念する石碑である。つまりこの興味深い歴史資料には、スカンディナヴィア人の死に対する態度が反映されている可能性が大いにある。そのため、このルーン碑文を体系的に分析し、そこから抽出されるスカンディナヴィア人の死に対する態度を明確にすることが申請者による研究の目的となる。

【研究の内容・方法】

ルーン碑文は、現在のデンマーク、ノルウェー、スウェーデンに広く分布し、紀元千年前後に帰されるものはそれぞれおよそ 200 基、200 基、2000 基を確認することができる。20 世紀の初頭以降、各国の言語学者によりその校訂版が計画され、スウェーデンの一部地域を除いては全て出版されている。申請者は、まずこれらの刊本に記されるルーン碑文のテキストから、その設置時代、地域、碑文作成者、碑文で記念される死者等のデータを抽出し、エクセル等でデータベース化する。これは、どのような属性をもつ人物が、どのような属性をもつ人物に対し、どのようなやり方で碑文を建てるという記念行為をはたらいたのかを明らかにすることを目的としており、広大なスカンディナヴィア世界における死者に対する態度の特色を浮き彫りにするための作業である。碑文で記念される人物は、国王、地域有力者、海外の戦闘で死んだ戦士、王に付き従って金品を得た者等多岐にわたっており、全体をデータベース化することでスカンディナヴィア世界における時代傾向、地域偏差、所属身分ごとの違い、死因による特色も明らかになると考えられる。

しかしながら申請者の研究は、以上に留まるものではない。碑文から得られる情報はなお断片的であり、それのみで紀元千年前後のスカンディナヴィア人のメンタリティを再構成することは容易ではない。そのために、別の歴史資料も用いなければならないが、申請者が注目するのは、スカルド詩とよばれる、国王以下の戦士たちの戦闘行為を讃えた韻

文である。スカルド詩はスカルド詩人と呼ばれる職能者によって国王や在地有力者の宮廷で謡われるために作成されているが、そこには度重なる戦闘のために死と隣り合わせである戦士のメンタリティが読み込まれている。さらにスカンディナヴィア人は、北欧神話の各挿話から想起されるようなキリスト教文化圏とは異なる独特の死に対するメンタリティをもっており、こうしたスカンディナヴィア人の宗教観念に対する理解もルーン碑文のデータを解釈する際には不可欠であると考えられる。

【結論・考察】

以上のような研究を一年にわたって続けた考察結果を二点述べておきたい。一つはルーン石碑を扱う際の方法論上の注意点である。通常ルーン石碑を扱う研究者は、そこに記されたテキストのみを取り上げるが、それはテキストの内容を誤解する危険性があるのみならず、石碑という他者の視線を意識して作成された「モノ」の持つ意味を捨象することになる。しかしながらこれはルーン石碑のもつ意味を理解するには致命的であり、テキストの解釈と同時にコンテキストを形成する「モノ」としての石碑の社会的機能も同時に考察すべきであることを主張したい。二つ目は今述べた方法論上の注意点を前提とした上で、実際に石碑がどのような機能を果たしているかである。石碑はスカンディナヴィア中に建立されているが、その分布図をよく見ると、ある一定の地域に集中しているように見える。その一つがデンマーク・ユラン半島北部とノルウェー南部であり、実はこの二つの地域は王権の生成地という点で歴史的に深いつながりがある。王権にとって重要な地域にこそ石碑は集中して建立されていたのではないかというのが私の仮説である。それがどのような紀元千年のスカンディナヴィア世界において意味を持ちうるのかを明らかにするのはこれからの課題である。